

156 ジャポニズム時代の日本人庭師—畑和助（2023年4月13日）

これまでに、フランスにある素敵な日本庭園をいくつもお紹介してきました（*）。今でこそフランス各地で観られる日本庭園ですが、フランスにおいて日本庭園がどのように発展してきたのでしょうか。今回は、一人の日本人庭師に注目して、その歴史の一端をご紹介します。

1867年に開催されたパリ万博に日本が初めて参加して以降、フランスではジャポニスムと言われ、日本美術が注目されました。1889年のパリ万博の際は、日本は、メイン会場となったシャン・ド・マルスに和風のパビリオンを設け、陶磁器、漆器、七宝、織物を出品しました。鈴木順二・慶應義塾大学名誉教授によると、現在のトロカデロ公園一帯が園芸展示場となり、ここに日本庭園が造られ、日本の植物も展示販売されました。植物の管理や造園のために日本からやってきたのが、庭師の畑和助（1865-1928）でした。園芸展示も大変好評で、日本の万博参加の成功に大きく貢献したと言います（写真右は、トロカデロ公園に展示された日本の盆栽を描いた万博当時の絵はがき）。



畑は、フランスにおける日本庭園の歴史の中で、重要な足跡を残しました。畑は、万博終了後もフランスに留まり、フランスの富豪たちの邸宅で、日本庭園の造園や維持管理を行いました。万博で畑が造った庭園を見て、畑の才能を見出したのが、詩人で評論家でもあったロベール・ド・モンテスキュー（1855-1921）でした。名門貴族の家に生まれたモンテスキューは、当時の社交界の名士たちと幅広い交友関係を持っていました。モンテスキューは、畑を庭師として雇い、ヴェルサイユにあった邸宅の庭に日本庭園を造らせました。

畑は、写真家で旅行家のユーク・クラフト（1853-1935）から注文を受けて、ヴェルサイユから近いレ＝ロジュ＝アン＝ジョザに日本庭園を造りました。ランス出身のジャポニザンであったクラフトは、1881年から1883年にかけて世界一周をした際に、日本に5か月間滞在しました。この時、クラフトは日本の伝統文化に魅了され、日本家屋を購入してフランスに送り、日本から大工を呼んで家屋を建てさせました。そして、畑は建物の



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

周囲に、和風の池泉、流水、滝を造り、橋や石灯籠も配した本格的な日本庭園を造りました。クラフトはこの日本庭園を「緑の里」と名付けました。残念ながらこの庭園は現存しませんが、クラフトの邸宅があった通りは、「ミドリ通り」(rue de Midori)と呼ばれています。



この後、畑はモンテスキューの紹介で、エドモン・ド・ロチルド男爵に雇われ、ロチルド邸の庭園の中に日本庭園を造りました。旧ロチルド邸は、パリに隣接する現在のブーローニュ=ビヤンクール市にあり、敷地の西にはセヌ川が流れ、北にはブーローニュの森が広がっています。現在は、ブーローニュ・エドモン・ド・ロチルド公園として、市民の

憩いの場になっています。公園内には、当時日本庭園があったことを思い起こさせる面影が残されています。赤い太鼓橋は現代に作られたものですが、年代を経たいくつかの石を見ることができます(写真右)。鈴木名誉教授の研究によると、当時の日本庭園には石灯籠があったそうですので、それら石灯籠の台の部分かもしれません(石灯籠の全体像は、写真右下)。



ジャポニスム時代、フランスにおける日本庭園の造園は、畑のような日本人庭師の活躍に強く影響されました。畑は、フランス人女性と結婚し、生涯一度も日本に帰ることなく、フランスで生涯を閉じました。静寂と気品の象徴である日本庭園は、19世紀のフランスの上流階級で高く評価されました。このように、日本人庭師の活躍があったからこそ、フランスにおいて日本庭園が発展しました。



* 43 アルベール・カーン庭園

113 日本庭園

124 モレブリエ東洋公園